

虹のかけはし

1. 虹が出た！

ながいながい梅雨も明け、
空には、まぶしいばかりの太陽が
かおを出していました。

みなみちゃんは、おひるねから目ざめたばかりのかおに
飛び込んでくる太陽の光に目をパチパチさせながら
いそいでベランダに飛び出してきました。

「わあい。虹が出てる。虹が出てるよ。
きれい。きれい。」



2. 小さなおとこの子

みなみちゃんがしばらく虹をみると
どこからともなく楽しそうな歌が聞こえてきました。

「・・・花咲く森のむこうから・・・ピーピーヒャララ・・・
すてきな花を咲かせましょう・・・ピーピーヒャララ・・・」

見上げると、虹の上を
一人の小さなおとこの子が、ふえをふきながら
こっちにむかって歩いてくるのが見えました。



3. 小人さん

みなみちゃんの家ベランダにおり立った、そのおとこの子は、
きれいな洋服をきて、サンタさんのように
背中に小さな包みを背負った、小人さんでした。

「わあーい。小人さん、こんにちは」
みなみちゃんがあいさつすると、
小人さんはおどろいたようにキョロキョロとしながらこう言いました。
「しまった。また、おりるところを失敗した。」



4. お花の国の・・・

「ねえねえ小人さん。
あなたはどこから来たの？」

「やあ、こんにちは。
ワシは、ここからずっと
遠いところにある、
花の国から、
虹をわたって来たんだよ。・・・

・・・まあ、言ってみれば、
ワシは花の国からやってきた、
お花の妖精の使者ってところかな。」



5. お花を咲かせに・・

「ワシはね、花の国の王様の命令で
この地上に花のたねをいっぱいまいて、
花をいっぱい咲かせるためにやってくるのさ。

それも、雨上がりの日、土の中に水がたくさん
ふくまれてるときをねらってね。

虹のはしを掛けて、そこをわたって来るんだよ。

・・でも、さいきんでは、よく虹をかけるところを失敗して、
土のない、コンクリートの上なんかにおり立ってしまうことが多いのさ。
今日のように・・

さいきんでは、すっかりコンクリートが
ふえちゃったからね。」



6. ちいさな植木ばち

「へえー。・・・でもね、うちにもちゃんと土はあるんだよ。・・・ほら。」

みなみちゃんは、ベランダのすみにあった、ちいさな植木ばちをもってきました。

「ずっと前にお花のたねをまいたんだけど、ぜんぜん芽が出てくれないんだ。」

「わっはっは。そうか、そうか。
お花さんも、そんなちいさな植木ばちの中で
咲くのはいやだって、言っているのかも知れないね。」



7. 黄金色に輝きたね

「それじゃあ、ワシが
持ってきたたねを
そこにひとつぶ
まいてあげよう。」

そう言うと小人さんは
背中にしょった袋の中から
小さな黄金色に輝きたねを
一個とりだして、
植木ばちのまんなか
そっとおきました。



8. お花の国では・・・

それから、小人さんは
お花の国のいろいろな楽しいおはなしを
みなみちゃんに話してくれました。

「ねえねえ、お花の国では、いろんなお花があるの？」

「そうだよ。赤いのやら、青いの。大きいものやら、小さいの。
・・・一番大きい花はね、そうだな、二階の、
このベランダより、もっと背が高いんだよ。」

「へえー。すごいのね。」

みなみちゃんは、目をかがやかせて、
小人さんの楽しいおはなしに耳をかたむけました。



9. 虹のはしから・・・

「おっと、そろそろワシは帰らなければ。」

小人さんは、ポケットからかいちゅう時計を取り出して、横目で見ながらそう言いました。

「えーっ。わたしも行く。」

みなみちゃんは、小人さんに向かって、そう叫びました。

「だめだよ。みなみちゃん。」

この虹のはしは、たくさん修行をつまなくちゃ、うまくわたることができないんだ。」

「えーっ、いやだいやだ。」

すでに虹のはしをわたりはじめた小人さんのあとを、みなみちゃんはおいかげようとしてました。

「だめだよ、みなみちゃん。あぶない！」

次のしゅんかん、みなみちゃんは足をふみはずし、下に向かってまっさかさまに落ちていきました。



・・・ずいぶん、たった気がします。
みなみちゃんは、ベッドの上で目をさました。

よこには、お母さんが
しんぱいそうにすわっています。

「あ、・・・お母さん。」

「よかったわ、みなみ。あんた、
ベランダからおちて、それからずっと
気を失っているもんだから、
お母さんとっても心配したわ。

・・・でも、ふしぎね。
かすりきずひとつないなんて。」



11. ベランダに咲くお花

「えっ、お母さん。わたし・・・」

はっと、思い、
みなみちゃんがベランダを見ると、

そこには、小さな植木ばちに、
それはそれはまぶしいばかりにかがやく
おおきな花が咲いていました。



12. 虹を、見にいこう！

「あら、いつのまに、あんな花が・・・」
お母さんも、不思議そうにしています。

そのとき、みなみちゃんは、かすかにあの歌を聞きました。
「花咲く森のむこうから・・・ ピーピーヒャララ・・・」

ベランダの向こうに見える青空に、
きれいな虹がかかっているのが見えました。

「ねえ、お母さん。あの虹を見に行こうよ。」

みなみちゃんは、お母さんの手をひっぱって、
外に飛び出しました。



13. 空き地を埋めたお花たち

みなみちゃんの家から少しはなれたところに
小さな空き地があります。
そこに人がたくさん集まっていました。

「あら、ここは、
来年あたり
ビルが建つっていう、
建設予定地よ。」

お母さんが言いました。

人なみをかき分け、中をのぞいてみると
そこは一面お花畑になっていました。

赤や黄色、青、・・・いろいろな花が
ところせましと咲いています。



「あら、まあ。こんなにたくさんの花、
いつのまに咲いたのかしら。」

お母さんも不思議そうにしています。

「おやおや、
私はこの土地の持ち主だが、
こんなにきれいな花たちが
ここに住みついたのなら、
とても、ビルを建てるわけにはいかないな。

・・・この花たちはそのまま残して、
ここに植物園でもつくることにしよう。」

みなみちゃんの後ろに立っていたおじさんが、
そう言いました。



みなみちゃんには、そのお花畑の上から空高くのびた虹の上を、小人さんが帰っていくのが見えました。

聞こえてくるあの歌も、空き地にいっぱい花を咲かせたあとの、満足そうな、高らかな歌い声でした。

「ねえ、お母さん。ほら、見える？・・・虹の上に・・・」

「いやねえ、お母さんにも虹くらいは見えますよ。きれいね。」

みなみちゃんは、やっぱり小人さんのことはだまっていようと思いました。小人さんと、二人だけのひみつにしておこうと。

「ねえお母さん。虹はいつ出るか、知ってる？」

「そうね、雨上がりによく見るけど、なんでかな。」

「うふふ・・・」

みなみちゃんは、（わたしは知っているよ）と、心のなかでつぶやきました。



それからみなみちゃんは、
虹がでるたびにベランダに出てぼんやり虹をながめています。

また今日も、いろんな所をお花でいっぱいにするために、
小人さんががんばっているのです。

「小人さん、がんばれ！」

みなみちゃんは、心の中でおもいきりそう叫びました。

そのとき、遠くから風によって、
かすかにみなみちゃんの耳まで笛の音がとどきました。

「ピーピーヒャララ・・・花咲く森の向こうから・・・」



おわり